

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

# エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題

## －地域養護活動をめぐる研究の検討をととして－

**The possibilities and problems of social welfare study using episodes: Through the examination of the researches over community foster care activities**

笹 倉 千 佳 弘  
井 上 寿 美

# エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題

## －地域養護活動をめぐる研究の検討をとおして－

The possibilities and problems of social welfare study using episodes: Through the examination of the researches over community foster care activities

笹 倉 千佳弘 (就実短期大学)

SASAKURA Chikahiro

井 上 寿 美 (大阪大谷大学)

INOUE Hisami

キーワード：アクチュアリティ，主体性，了解可能性

### Ⅰ. 研究目的

本研究の目的は，社会的養護児童の子育ての社会化としての「地域養護活動」をめぐる研究の検討をとおして，エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題を明らかにすることである。

社会福祉学における質的研究の動向を探るため，日本社会福祉学会の『社会福祉学』（1993年～2017年）をレビューしたところ，管見の限りでは，質的研究を方法的側面から考察したものは志村（2012）のみであった。隣接領域である教育社会学が『教育社会学研究』において複数回，質的研究をめぐる特集を編んだり論考を掲載したりしていることと比較すると<sup>i</sup>，『社会福祉学』では，方法としての質的研究というテーマにはあまり関心が払われてこなかったのかもしれない。そのような中で，大橋（2007：175）は，「（ソーシャルワーカー個々の）実践活動が正しかったとか，間違ったとか，あるいは正しかったがサービスを必要とする人にかかわる中でそれが揺れ動いているというような過程の記録化が十分でなかったし，その研究方法も残念ながらうまく構築できなかった」という認識に立ち，「質的研究こそ，実は社会福祉分野に必要なものと思う」と述べている。したがって，『社会福祉学』において質的研究というテーマに関心が薄かったということが，社会福祉学全般において質的研究が関心外であったということにはならないであろう。

以下では，志村（2012）を手掛かりに『社会福祉学』の質的研究の動向について述べることにする。志村のレビューによると，2007年度から2011年度の間に『社会福祉学研究』に掲載された論文165本のうち，質的研究と判断される論文は48本<sup>ii</sup>で全体の29%である。その内訳を分析方法にしたがって整理すると，M-GTA12本，質的研究10本，質的分析8本，GTA5本，ライフヒストリー2本，エスノグラフィー2本，KJ法2本，内容分析1本，質

的内容分析1本，事例研究1本，事例1本，ブール代数アプローチ1本，ナラティブ分析1本，テキスト分析1本となっている．分析対象となっている48本の論文タイトルが明記されておらず，志村が分析対象とした論文を確定することはできない．しかし，そこでとりあげられている論文の分析方法から類推すると、『社会福祉学』において事例をもとにした研究は質的研究のなかでもきわめて少ないことは明らかである．また志村（2012：86）は，「実践と理論を循環させることがソーシャルワークにおけるエビデンス・ベースドの研究や実践に求められていることであり，GT-GAの研究<sup>Ⅲ</sup>はその役割にふさわしい研究の理路である」とえたい」と結論付けていることから，エピソードを用いた研究を重視していないと言える．

大橋が指摘するように，社会福祉実践の活動を省察するには「揺れ動いているというような過程の記録化」が重要であり，エピソードはそれに長けている．それにもかかわらず，質的研究としてのエピソードを用いた研究はわずかであり，重視されてこなかったという事実がある．そこで，その可能性と課題を明らかにし，社会福祉学研究発展の一助にしたいと考える．

## Ⅱ．研究の視点および方法

### 1．資料の説明

以下で検討する研究は，「地域養護活動」に参与観察（後述）して入手したデータをもとにエピソード記述で子どもの姿を描き出し，考察を加えたものである．地域養護活動とは，岩手県和賀郡西和賀町において1980年代から取りくまれてきたものであり，児童養護施設の子どもが，普段，生活している施設から離れた地域で，施設の職員と地域住民等と共に，その地域ならではの暮らしを経験できるよう，おとなたちが協働して子どもを養護する諸活動のことである．

### 2．研究の視点

エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題を明らかにするため，地域養護活動をめぐる研究を，エピソード記述によって描き出される現実の特徴という観点から検討を加える．

## Ⅲ．倫理的配慮

本研究は文献研究であり，「日本社会福祉学会研究倫理指針」に則っておこなった．本研究の資料として用いたエピソードは参与観察によって収集した．参与観察においては，関西福祉大学社会福祉学部研究倫理審査委員会承認を得，「日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守した．参与観察にあたり，事前に，事業主催者，子どもが所属する施設の施設長等に，a. 調査目的，b. 調査方法，c. 調査不同意の際に不利益を受けない権利，d. データの管理法，e. 協力者が中止・保留を申し出る権利，f. 入手したデータの公表について文書を示して説明し同意を得，子どもについては口頭で説明し了解を得た．調査結果の公表にあたり，エピソード

の登場人物は新幹線の名称を借用し、エピソードの内容については、子どもの認識に影響を与えない範囲で手を加え、個人が特定されないように配慮した。地名や事業名を固有名詞のまま表記することに関しては、関係者から了解済である。

#### Ⅳ. 研究結果

地域養護活動をめぐる研究を、エピソード記述によって描き出される現実の特徴という観点から検討を加える前に、そもそも、現実とはいかなるものであるのかという問から始めたい。なぜなら、現実をどのように認識するのかということは、それをいかなる方法で記述するのかということと密接につながっているからである。

##### 1. 現実とは何か

現実とは、どのようなときにも、同じように映っているわけではない。なぜなら私たちは、いわゆる日常的生活世界の他に、夢の世界や空想の世界等、様々な世界の住人であるからだ。したがって現実とは、いくつもの層が折り重なっており（多層的）、それぞれの層には、その層を生じせしめているいくつもの根源がある（多元的）と考えられる。

現実とは、このような多元性を帯びた多層性を特徴としてもっている。そして、私たちにとっての現実とは、自分と自分をめぐる「ひと・もの・こと」との様々な関係が網の目のように編まれたものであり、その網の目の関係は一瞬たりとも同じではない。したがって現実とは、私たちそれぞれにとっての「いま・ここ」で生起する関係の網の目の連続によって構築されているものであると理解できる。

仮に現実というものが、いつも一定していて変わらないものであるとすれば、それはどの時点ですくいあげても同じであろう。しかし現実とは、一瞬たりとも同じではない関係の網の目のように編まれたものであるのだから、現実をそのようなものとしてすくいあげるには、当事者の目に映る動的な生の断面を、当事者の主観を重視する「生きられた経験」として記述する以外に方法はない。当事者の主観を重視するということを、「幻聴」を例にあげて説明すると次のようになる。

通常、幻聴とは、実際には音がしていないのに、聞こえるように感じることでと理解されている。しかし、幻聴を体験している当事者にとっては、声は聞こえるように感じているのではなく、実際に声は聞こえているのである。幻聴はその人固有の意味世界において生じている主観的事実である。幻聴を生きられた経験としてとらえるならば、声の存在を否定するのではなく聴こえた声、すなわち、「聴声」と位置づけ（日本臨床心理学会2010）、当事者が語るその声に耳を傾けなければならない。

当事者の目に映る現実を、彼女／彼らの主観を重視した生きられた経験として記述するためのデータを入手する方法の1つが参与観察である。

## 2. 参与観察とは何か

参与観察は，調査者が「その場」に赴き，そこに生きる人たちの意味世界を，当事者の視点から理解するための方法である。地域養護活動への参与観察に即して言えば，それに参加する子どもやスタッフの姿や声に注目して，自分と自分をめぐる「ひと・もの・こと」の，動的で多様な関係の網の目を，彼女／彼らがどのようにとらえているのかを明らかにすることである。

従来，参与観察では，1次資料の入手にあたって客観性を保つために，調査者は調査協力者と一線を画す必要があると言われてきた。たとえばそれは，「一步距離をおいた関与」や「客観性を失わないラポール」（佐藤1992：145）と言われるスタンスである。しかし実際には，調査者が調査協力者と一定の距離を保っていたとしても，その場に存在しているということと自体が，調査協力者に何らかの影響を与えている。また現実を，動的な関係の網の目としてとらえている以上，調査者と調査協力者は「つねに・すでに」相互行為を繰り返していることになる。

このように見てくると，参与観察で入手するデータは，調査者を含めたその場に居合わせた人たちによって共同生成されたものであり，その点において社会構築的な性格を免れ得ないものであることがわかる。そして，参与観察で入手したデータを使い，生の現実を生きる子どもの意味世界を，当事者の主観を重視した生きられた経験として文字に定着させる方法の1つがエピソード記述である。

## 3. エピソード記述とは何か

エピソード記述の説明に先立って，子どもの育ちの観点から，生の現実を生きる子どもにとっての意味世界の内実を検討しておきたい。

### ①生きられた経験としての「接面」

大田（2013：309－310）によると，生の現実を生きる子どもの育ちとは，「自らと異なったひと，こと，ものとの接触の中で，異物を受け入れたり，反対に拒否したり，記憶のなかに蓄えたりすること」とおした，新たな自分の創造であるという。子どもが育つ場面，言い換えれば，子どもにとって新たな自分が創造される場面では，独特の雰囲気をもった空間や時の流れが生じており，立ち会った者はそれを感じることがある。鯨岡（2015）はこのような時空間を「接面」と呼んでいる。子どもの育ちに立ち会った者が感受している接面では，喜怒哀楽にかかわる情動が行き交い浸透しあっている。しかしそれは，目に見えるような明確な形を伴っているわけではなく，感受されて初めて存在することになる。しかも接面では，そこに立ち会った者が必須の構成要素となる。したがって，接面で行き交い浸透しあっている情動を感受するには，自らの身体に耳を澄ませ，そこに関与する者の経験を当事者の視点からとらえる姿勢が求められる。

このような接面を他者と共有する方法の1つがエピソードである。なぜならエピソードは、その場に生きる人を生き生きと蘇らせるために、経験したことの全体から印象深かったことを切り取って提示できるからである。それゆえエピソードは、情動の動きが重視される保育実践の場で、保育者が自らの保育を振り返る資料としてしばしば用いられてきた経緯がある。そのため保育者が、子どもとのかかわりで感受した接面を記述するエピソードでは、記述する者と子どもの育ちに立ち会った者は、同じ人物となっている。

しかし、本研究で参照する社会福祉研究では、子どもの育ちに立ち会った者というのを、必ずしも、子どもに直接、かかわった者だけに限定しているわけではない。なぜなら、子どもが新たな自分を創造する場面を他者から「聞く」、あるいは、他者とのかかわる子どもが新たな自分を創造している場面を「見る」というような場合であっても、聞いた者や見た者が、時として、子どもの育ちに立ち会い接面を感受すると考えられるからである。

## ②関わり手と記述者

このように見てくると、接面をエピソードとして文字に定着させる人（以下では「記述者」とする）は、関わり手である場合と、関わり手と異なる場合に分かれることに気づかされる。そこで、最初に前者の、記述者が関わり手である場合から考えることにしたい。

記述者が関わり手であるということは、同一人物が2重の役割を担うということ意味する。すなわち、実際場面で子どもとやりとりをする関わり手である自分と、関わり手である自分を含めた接面全体を俯瞰する（＝メタ観察する）自分である。そのためエピソードでは、関わり手である自分、記述者としてメタ観察する自分、子どもという3者の喜怒哀楽にかかわる情動が行き交っている接面が記述されることになる。その際、関わり手と記述者が同一人物でありながら役割が異なっているため、関わり手である自分とメタ観察する自分とが若干の距離をとりながら、関わり手が経験した事象をあくまでも忠実に記述することが求められる（鯨岡2005）。したがってエピソード記述では、記述者の主体性が大切にされることになる。

次に、記述者が関わり手と異なる場合について考える。記述者が関わり手と異なるということは、記述者が子どもと直接的なやりとりをしていないということ意味する。しかし、先に指摘したように、その場に立ち会っていないくても、子どもが新たな自分を創造する場面を他者から聞く、あるいは、そのような場面を見ることをとおして、聞いた者や見た者が接面を感受する場合がある。そのため、聞いた者や見た者が記述する役割を担ったエピソードでは、関わり手、記述者、子どもという異なる3者の喜怒哀楽にかかわる情動が行き交っている接面が記述されることになる。また、記述者が関わり手と異なる場合においても、エピソードを記述する際、記述者による接面の感受が前提となっているのであるから、記述者の主体性が大切にされることになる。

### ③エピソード記述の特徴

エピソード記述では，接面を，「いま・ここ」で生起する動的な関係の網の目としてすくいあげるため，その特徴として，個別性と一回性を挙げることができる．エピソード記述における個別性とは，接面が，他にもないその子ども，その関わり手，その記述者によって創造されているため，記述されたエピソードに同じものは1つとしてないということである．また，エピソード記述における一回性とは，エピソードに同じものは1つとしてないため，記述されたエピソードは2度と繰り返されることはなく，唯一のかけがえのないものであるということである．以下では，井上・笹倉（2017）における「長財布」というタイトルのエピソードを引用しながら具体的に考えてみたい．

このエピソードは，ハヤテという中1の男児が溪流で川遊びをしている時，ズボンの後ろポケットに入れた長財布を私（＝調査者）に預かってほしいと申し出たことを発端にして，ハヤテと彼をめぐる私という「ひと」，長財布という「もの」，長財布を預けるという「こと」との動的な関係が描かれている．

いきなりハヤテは，「おじさん，財布，預かってくれる？」と単調な口調で私に告げた．ハヤテの周りでは，暇そうにしているおとなは私しかいなかったし，川遊びに長財布は邪魔になるのだろうと思い，即座に「いいよ」と応え，長財布を預かった．すると間髪をいれず，「5420円入っているから」と長財布の中に入っている金額を告げた．「わかった」と応えた後，5420円という金額を頭の中ではんすうした．

川遊びが始まってしばらくすると，ハヤテは，私に長財布を預かってくれるかどうかについて打診し，了解を得てそれを預けることになった．川遊びでは長財布が邪魔になり，川遊びに熱中してそれを川に落とすようなことになっては人生の一大事であると思ったのであろう．ところが，当時の私は，被虐待児にとって，お金が特別な意味を持っていることに思い至らなかった．

しばらく川遊びを楽しんだハヤテは，再び私に近づいてきた．さきほどと同様に単調な口調で，「おじさん，財布ある？」と尋ねた．そこで「あるよ」と今度ははっきりと応えた．私の返事を聞くと，ハヤテはすぐさま背を向けて，先ほどまで一緒に遊んでいた年下の子どものところに戻っていった．

ハヤテは長財布を預けた後，それがどれほど大切なものであるのかという点で私との間に温度差があるのを敏感に感じとったようである．そのためハヤテは，再度，長財布がきちんと保管されているかどうか確かめることにした．そのうちに私も，長財布の中身を10円単位で覚えており，くりかえし長財布の存在を確かめるのは，よほどそれが気になっているのだ



ろうと思い始め、ハヤテの不安を打ち消すかのように長財布の保管についてはっきり伝えるようになった。そして、長財布の保管を確かめる最後の場面がつぎの個所である。

川の中で遊んでいるハヤテの後姿をぼんやり眺めていると、不意にハヤテが私の方へ振り向いた。今度は何か言ったわけではない。しかしその目は、「おじさん、財布は大丈夫？」と語っていたので、私も彼の顔を見ながら、無言で、だがしっかりと、「大丈夫だよ」と頷いた。その後、ハヤテは長財布をめぐって確認をすることはなかった。

ハヤテと私の無言のやりとりの後、彼が長財布の保管について確認することはなくなったということは、一定の意志疎通や共通理解が築かれたことを意味している。ハヤテの私という「ひと」に関する認識、長財布という「もの」に関する認識、長財布を預けるという「こと」に関する認識は、それぞれ、次のように拡がっていったと考えられる。すなわち、私という「ひと」に関する認識は、「スタッフではないおとなの人」という理解が残されたまま、そこに「長財布を預ける相手」という理解が加わるというようにして、長財布という「もの」に関する認識は、「肌身離さず持つもの」という理解が残されたまま、そこに「特定の他者なら預けてよいもの」という理解が加わるというようにして、長財布を預けるという「こと」に関する認識は、「考えも及ばないこと」という理解が残されたまま、そこに「特定の他者に頼んでもよいこと」という理解が加わるというようにして拡がっていったのである。

このような認識の拡がりを読み取れるエピソードは、他でもないその子ども、その関わり手、その記述者によって創造されているため同じものは1つとしてなく（個別性）、エピソードに同じものは1つとしてないため2度と繰り返されることはなく、唯一のかけがえのないものである（一回性）と言える。

#### 4. エピソード記述をめぐるリアリティとアクチュアリティ

エピソード記述とは、接面における独特の雰囲気をもった空間や時の流れを感受した記述者が、自分の身体に耳を澄ませ、子どもや関わり手の心の動きをあるがままに表現したものである。では「あるがまま」に表現するとは、どのような「現実」を記述することなのであろうか。現実に対応する言葉には「リアリティ」と「アクチュアリティ」がある。木村（1994）は、両者を語源から説き起こして次のように述べている。

「リアリティ」はラテン語の「レース」resつまり「事物」という語から来ていて、事物的・対象的な現実、私たちが勝手に作りだしたり操作したりすることのできない既成の現実を指す場合に用いられるのが原義である。これに対して「アクチュアリティ」のほうは、ラテン語で「行為」「行動」を意味する「アーキオー」actio から来ている。だからそれは現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、対象的な認識



によっては捉えることができず，それに関与している人が自分自身のアクティヴな行動によって対処する以外ないような現実を指している（木村1994：29）。

上記にしたがって整理すれば，リアリティとは，「事物的・対象的な現実，私たちが勝手に作りだしたり操作したりすることのできない既成の現実」を指しており，「現実を構成する事物の存在に関して，これを認識し確認する立場から言われ」（木村2000：13）ていることがわかる。一方，アクチュアリティとは，「現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実，対象的な認識によっては捉えることができず，それに関与している人が自分自身のアクティヴな行動によって対処する以外ないような現実」を指しており，「現実に向かってはたらきかける行為のはたらきかけそのものに関して言われ」（木村2000：13）ていることがわかる。

エピソード記述における接面を，上記のアクチュアリティ理解に即して説明すれば次のようになるであろう。先に述べたように，接面は目に見えるような明確な形を伴っているわけではなく，感受されて初めて存在することになる。そして，接面が感受できたのであれば，その前提として，本人が自覚しているかどうかにかかわらず，自分と自分をめぐる「ひと・もの・こと」との間に編まれた，網の目のような相互関係としての「アクティヴな行動」や「はたらきかけ」がすでに存在していたことになる。

また本研究における現実を，上記のアクチュアリティ理解に即して説明すれば次のようになるであろう。先に述べたように，現実とは，自分と自分をめぐる「ひと・もの・こと」との様々な関係が網の目のように編まれたものであり，その網の目の関係は一瞬たりとも同じではないものであるととらえた。このような現実では，人は現実の構成要素であると同時に，「現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実」を「つねに・すでに」生成させている存在でもある。

このように見てくると，エピソード記述は，アクチュアリティとしての現実を描き出していると言える。

## 5. エピソード記述をめぐる客観性と再現性

科学の要件は，客観性と再現性であると言われている（濱田2011）。客観性とは，たとえば，液体の水が温度によって固体や気体に変化する現象を調べようとする際，熱い・冷たいといった個人的な感覚に頼るのではなく，温度計を用いて誰が測っても同じ温度が得られるということである。また再現性とは，たとえば，ある日，液体の水を0℃まで冷やせば氷になり，100℃まで熱すれば水蒸気になるならば，別の日に，同じ条件の下で同じ手順にしたがえば同じ結果が得られるということである。このように，主観に左右されず，同じ条件の下で同じ手順にしたがえば同じ結果が得られるという客観性と再現性の点からすると，個別性と一回性を特徴とするエピソードを用いた研究は，科学的であるとは言い難い。

また、エピソード記述が描き出しているアクチュアリティに注目すると、エピソードを用いた研究が科学と相いれないのは当然とも言える。なぜなら木村（1994：30）によると、「科学が対象としているのは完了形で固定できるリアリティだけ」であるからだ。そして木村（1994：31）は、「現在進行形のアクチュアルな非物質的生命に着目するためには、私たちは科学以外の目を必要とする」と続けている。アクチュアリティとしての現実を「科学以外の目」で描き出そうとする試みの1つが、エピソードを使った研究であるに違いない。

以上から、エピソードを用いた社会福祉研究の可能性は、子どもの姿をめぐる現実を、リアリティとしてではなくアクチュアリティとして描き出せることであると明らかになった。また、エピソードを用いた社会福祉研究の課題は、エピソードが個別性と一回性という特徴を有しているため、研究の妥当性を客観性や再現性によって担保できないことであると明らかになった。

## V. 考察

エピソードを用いた社会福祉研究結果の妥当性は、何によって担保されるのかについて考察する。個別性と一回性を特徴とするエピソード記述をもとにした研究結果の妥当性は、エピソードがどの程度のアクチュアリティをともなって読み手に受けとめられるかによって判断される。その際、読み手が類似の体験をもっているのかどうかによって大きく2つに分かれる。

読み手が類似の体験をもっている場合は、エピソードに描かれた世界を抵抗なく受け入れられる、時には、積極的に受け入れられるかもしれない。なぜなら、エピソードをとおして提示される状況に自分のこれまでの体験を重ね合わせたりしながら、「そこに生じていることを最終的に『あり得ること』と納得できる」（鯨岡2005：44）からである。

では、読み手が類似の体験をもっていない場合はどうであろうか。読み手は、類似の体験がなくても、個別具体的なエピソードを読んでわが身に起こったかのように心を動かされることがある。なぜなら、「そのような納得は自分だけができることではなく、たいていの人はその場に置かれればそのように納得するはずであるという暗黙の操作、つまり自分を不特定多数の一人とみなす超越的な操作が暗黙のうちになされる」（鯨岡2005：44）と考えられるからである。

私たち人間は、「身体的には類的同型性をもち、それゆえ感受する世界はかなりの程度同型的であることを基礎に、幾多の類似した経験」（鯨岡2005：45）をもつことができる。そして私たち人間は、「絶対の個であると同時に類の一員」であり、加えて、「豊かな表象能力を付与されている人間は、その想像力によって、他者に起こったことはそのようなかたちで我が身にも起こる可能性がある」と理解できる」（鯨岡2005：45）のである。

仮に、類似の体験がないと心が動かされないとすれば、古今東西の古典と言われるような

小説や映画は存在しないことになる。その作品がフィクションであれノンフィクションであれ、そこに描かれている世界で起こる出来事に類似する体験がなくても、私たちの多くは、時代と場所を超えて、その作品を享受することができるのである。

そもそも私たちは、状況依存的な存在である。それを青木（2000:170－171）は、「人間は、彼・彼女が生きる時代と社会に型どられた、状況関連的なコンテクストのなかでしか生きることができない」存在であると表現している。しかし同時に、「人間は、みずからの位置でみずからの役割を演じることで状況に参加し、状況を主体化する」存在でもあり、「その状況は世界に繋がっている」とも述べている。つまり私たちは、状況依存的であるからこそ、その状況にかかわらざるを得ないという点において世界につながっていると言えるのである。

このように見てくると、エピソードを用いた社会福祉学研究結果の妥当性は、次のようにして担保されていることがわかる。動的な関係の網の目に生きる私たちの生きられた経験は、その文脈を超えて他者の世界に開かれている。それを前提にしながら、エピソードを読んだ読み手が、そこにアクチュアリティを実感し、あり得る現実、起こり得る現実であると納得できること、すなわち、了解可能性によって担保されていると言える。

上記は、科学的であると言われる研究では、結果が提示される前の入手手続きによってその妥当性が判断されるのに対して、エピソードを用いた研究では、結果が提示された後の読み手による了解可能性によってその妥当性が判断されるということを意味している。さらに言えば、エピソードを用いた研究では、記述者も含めたエピソードに直接、関係する人たちに加えて、妥当性の判断において読み手にも主体性が求められているということなのである。

研究者の主体性が組み込まれるエピソードを用いた研究に対して、恣意的なものでしかないという批判がある。確かに研究者の恣意性を免れることはできない。しかし、リアリティの追及ではなくアクチュアリティの追求をおこなうとすれば、研究者がその恣意性を自覚し軽減する努力を怠らない限りにおいて、エピソードを用いた研究は意味のあるものであると考える。

## Ⅵ. 結論

本研究の目的は、地域養護活動をめぐる研究の検討をとおして、エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題を明らかにすることであった。エピソード記述によって描き出される現実の特徴という観点から検討を加えた結果、エピソードを用いた社会福祉研究の可能性は、子どもの姿をめぐる現実を、リアリティとしてではなくアクチュアリティとして描き出せることであり、エピソードを用いた社会福祉研究の課題は、エピソードが個性と一回性という特徴を有しているため、研究の妥当性を客観性や再現性によって担保できないことであると明らかになった。エピソードを用いた社会福祉研究結果の妥当性は、エピソードを読んだ読み手が、そこにアクチュアリティを実感し、あり得る現実、起こり得る現実であると納得

エピソードを用いた社会福祉研究の可能性と課題－地域養護活動をめぐる研究の検討をととして－

できること、すなわち、了解可能性によって担保されていると考察された。

＊本研究は、日本社会福祉学会第65回秋季大会（於：首都東京大学，2017年10月22日）における発表内容に加筆修正をおこなったものである。

- i 1950年代から1990年代については笹倉（1999）を，1990年代から2000年代については清水・内田（2009）を参照されたい。
- ii この数値は，志村自身が「研究方法を質的研究，量的研究と二分して論ずることに違和感を覚える立場」（志村2012：83）であることから，あくまでも「暫定的にカウントした」（志村2012：82）ものである。
- iii グラウンデッド・セオリーについては，志村（2008a），志村（2008b），志村（2008c），志村（2009）を参照されたい。

## 【文献】

青木秀男（2000）『現代日本の都市下層－寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。

濱田嘉昭（2011）『科学的探究の方法』放送大学教育振興会。

井上寿美・笹倉千佳弘（2017）『虐待ゼロのまちの地域養護活動－施設で暮らす子どもの「子育ての社会化」と旧沢内村』生活書院。

木村 敏（1994）『心の病理を考える』岩波書店。

木村 敏（2000）『偶然性の精神病理』岩波書店。

鯨岡 峻（2005）『エピソード記述入門－実践と質的研究のために』東京大学出版会。

鯨岡 峻（2015）『保育の場で子どもの心をどのように育むのか－『接面』での心の動きをエピソードで綴る』ミネルヴァ書房。

日本臨床心理学会（2010）『幻聴の世界－ヒアリング・ヴォイシズ』中央法規出版。

大橋謙策（2007）「座談会 混迷する人びとの暮らしと社会福祉実践・研究の未来」『社会福祉研究』（鉄道弘済会福祉部）100，162-178。

大田 堯（2013）『大田 堯自撰集成1 生きることは学ぶこと－教育はアート』藤原書店。

笹倉千佳弘（1999）「方法としての解釈的アプローチ－教育現実の構成に関する一考察」『教育科学セミナー』（関西大学）30，45-53。

佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク－書を持って街へ出よう』新曜社。

清水睦・内田良（2009）「研究レビュー 質的研究の10年」『教育社会学研究』84，103-121。

志村健一（2008a）「グラウンデッド・セオリー－アクション・リサーチの理論と実際 No. 1」，『ソーシャルワーク研究』（ソーシャルワーク研究所）34（1），71-75。

———（2008b）「グラウンデッド・セオリー－アクション・リサーチの理論と実際 No. 2」，『ソーシャルワーク研究』（ソーシャルワーク研究所）34（2），51-55。

- (2008c) 「グラウンデッド・セオリー・アクション・リサーチの理論と実際 No. 3」, 『ソーシャルワーク研究』 (ソーシャルワーク研究所) 34 (3), 52-55.
- (2009) 「グラウンデッド・セオリー・アクション・リサーチの理論と実際 No. 4」, 『ソーシャルワーク研究』 (ソーシャルワーク研究所) 34 (4), 71-75.
- (2012) 「春季大会シンポジウム エビデンス・ベースドの社会福祉研究・実践をいかに進めるか 質的研究の動向と課題」, 『社会福祉学』 53, (3), 82-86.